
ドラゴンフライ！

モリモリ越後

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ドラゴンフライ！

【NZコード】

N4737M

【作者名】

モリモリ越後

【あらすじ】

『想術』！ それは意識の外にある生物とは別の次元にある力
『英雄』！ 世の混乱に立ち向かう勇ましい者の呼称

混乱の世界。大地を裂き、大気を吹き飛ばすかのごとく現れた『星を搖るがす者』。圧倒的な絶望に押しつぶされ、諦め始める星に永住する者達。

絶望の最中。積み重ねられた苦しみと悲しみが、一人の英雄を呼ん

だ

第一話、出現！！（前書き）

第一話、出現！！！

！ ドラゴンフライ ！

空は青く澄んで、どこまでも高い。サンサンと照りつける太陽が乾いた大地を灼熱にする。

フライパンのような砂地。その広大な景色の中に寂しくたたずむ岩場の中に、一人の剣士の姿がある。砂の大地において、この岩場の影は実に貴重な隠れ場所である。

剣士は底が抜けそうなボロ袋からボトルを取り出し、キャップを外して口をつけた。グイと上を向いて中にあるはずの水を飲み干そうとする。しばらくそのままの姿勢で固まる男。

「んだつ！」

一声叫び、ボトルを砂地に叩きつけた。額に手を当ててうつむく剣士。ふと、顔を上げた先に見えた蜃氣樓しんきろうのような人口の建造物の群れ。朧おぼろな光明を目視して、剣士はため息を一つついた。

鎧よろいびれきつた様相の村を生温い風が吹き抜ける。村の入り口に貼り付けてある看板には「グルタ南東戦士宿営地（トルタナ皇國）」と書いてある。かつて、人々が強い意思を持つて恐怖に立ち向かつていった時代の名残である。まあ、「かつて」といってもつい数ヶ月前のことだが……。

存在価値を失った村の一角に辛うじて存在しているギリギリ酒場

とも言えなくもない民家の中に、例の剣士はいた。カウンターに腰をかけ、肘を着いてクールに言い放つ。

「マスター、コーラを一つ。ストレートで」

「だめ」

タバコをくわえたエプロン姿のオイちゃんはドライに言い放った。
「二秒程の沈黙……。」

「……じゃ、いいよ。氷入れちゃって」

剣士は妥協を加えて再注文した。

「やだ」

「何で」

「コーラは品切れだ。3ヶ月前から」

「……そうか」

「ちなみに客も3ヶ月ぶりだ」

「 そうか」

剣士は気まずそうに額を搔いた。

「じゃ、水をくれ」

「あいよ」

一つ返事をして大柄な店主は木製のコップを一つ、厚い手に取つてから蛇口を押した。チョロチョロと水が頬りなく流れ出でくる。その様子を剣士は何の意思も無しに眺めている。

コップに半分ほど水を入れると、店主はそれを剣士に渡す。コップを渡すと、店主は自分から剣士に話しかけた。

「あんた義勇軍かい」

「……いいや?」

「じゃ、軍兵团はぐれか」

「いんや?」

剣士は冷えた水を一口、口に含むと「うまい」と呟いた。そして続けるように話す。

「……俺は戦士じゃねえし、義賊や人切りの類でもねえ。しがない

「一トさ」

剣士はそう言つと一気に水を飲み干した。

「今の時代多いやな。何せどの仕事を選んだって、意味があるのかどうかもわからねえからな」

店主が苦々しく、時代の嫌味を言つた。

「何も仕事だけじゃねえさ。モラルや常識なんでもの、今はぼやけちまつていい。だからこそ、あんなに血氣お盛んだつた百牙隊も解体しちまつたのさ……」

「何だ。お客さん、“キバ”（百牙隊）出かい？」

「さあね。どつちかな」

含みのある笑みを浮かべて剣士はコップを差し出した。店主はそれを受け取つて一杯目の水を入れ始める。

それは突然のことだった。

「誰か、誰か腕の立つ者はいなか！－ キヤ、キャラバン隊がグラムの小隊に襲われた！ 助けてくれ！－！」

「解説コーナー 「グラム」」

グラムとは、「半漁人」です。下は魚、上は人間 と言つても顔は豚に近いです。また、男のみなので「残念な人魚」と言い切つても過言ではないでしょう。 以上。

「おいおい、グラムだと！？ まさかこの集落まで襲わないだろ？ な？」

「どうだかな。小隊を形成しているとなると、それなりに優秀なグラムが率いているだろ？ 予測12・3体はいるとすると、想定外の障害さえなればこの程度の集落なら楽々落とせるからな」

剣士はちびちびと水を飲みながら呟いた。

「だれか、助けてくれよおつ！！」

店の外から男の悲痛な叫び声が聞こえる。

「お、おいおい。キャラバンを潰したらグラムはここにくるのか？」

「そりやまざいよ」

「なあに、簡単な問題だよ。ここから逃げりや良い」

「バカ言え！ 着の身着のままでこの砂漠を渡つていけるか！」

店主は取り乱して剣士に怒鳴った。

「オレは渡つてきたぞ」

剣士は冷ややかな視線を店主に送つた。その視線を受けて、店主は思わずつばを飲み込んで黙つた。

「……な、なあ。あんたキバの出なんだろ？ 助けてやりなよ。腕は立つんだろ？」

申し訳なさそうに店主が言った。

「あんなあ。さつきからキバ、キバつつうけどよ、大半のキバ兵隊はグラム4・5体と戦つて勝てりや御の字なんだよ。相手は小隊だぜ？ 並じや勝てんよ」

「う、……む」

店主は黙り込んでうつむいた。それを見て水を一気に飲み干す剣士。ブハッと一息つく。

「……しかし、まあキャラバン隊を助けりや礼は弾むかもな」

剣士はそう言つて立ち上がつた。

「じつそさん」

低い扉に手をかける剣士。

「……！ ちょ、ちょっと待ちなよ。さつきお密さん、勝てないって言つてたる。死ぬ気か！？」

店主はカウンターから身を乗り出して剣士を引きとめる。

「俺は、“並の奴なら死ぬ”つつたんだよ」

低い扉に肘を掛けて、笑みを浮かべる。店主はさつきまでとは違う威圧感を感じて思わず身震いをした。ヒラヒラと手を振りながら店を出て行く剣士。

「数分で戻る」

その言葉を受けて、店主は店の奥から自分用の酒と客人向けの口一ラをカウンターに運び、ゆつたりとタバコに火をつけた。

キャラバン隊を取り囲むグラムの群れは、卑しい笑みをくゆらせながら「ニキニキ」と声を発している。

「ひいっ、く、来るな・・・！」

商人達は身を寄せあつて怯えた。荷車を引いていた太めの鯨は、すでに骸と化している。

「オホツ、怯えて震えなさい。非力な人間どもっ！」

貴婦人のようなポーズで高笑うハイ・グラム（少しお頭の良いグラム）。半漁人である彼が、何故乾燥甚だしい砂漠にいるのか。

「い、命だけは・・・」

ひざまずいて命を乞う商人A。半漁のハイ・グラムは一コリと笑つて彼に語りかけた。

「生きたい力工？ならば地に額を着けて乞うがよいぞ」

言われたとおりに地に伏す商人A。

“ザシヤツ！”

同時に、吹き飛ばされた彼の首。血痕が砂地に広がる。悲鳴を上げる他の商人たち。

「オホホホホツ、おバカさん！ 全員殺すに決まってるじゃない」自慢のトライデント（三叉の槍）を得意気に回すハイ・グラム。高貴な半漁が笑うと、続いて取り巻くグラムたちも「ニキキキ！」と下品な笑い声を上げた。

その刹那、突然に刎ねられるグラムの首。グラムが一頭、その場に崩れ落ちた。

「おバカモノツ、お上品に笑いなさい！！」

甲高い声でグラムどもを罵倒する半漁のハイ・グラム。グラム達

は肩を揺すりながらうろたえる。その光景を震えながら見つめる商人達の背後、倒れた輸送車の中から様子をうかがう少女の姿。この少女の名はルタ。訳あって、ヒッチハイク頼みで女一人旅をしている。

「やつば～、あいつら非道だわ。『リヤ死ぬかもしれんぞ』影で見守りながら打開策を探すルタ。しかし周囲には十数体のグラムが円状にこの場を囲つており、見つからずに脱出することは不可能としか思えない。

「ん～。色仕掛けとか駄目かな、ルタ流『エロエロイリュージョン』で奴らの男心をくすぐりまくれば・・・」

「エロエロイリュージョンとは、ただくねくねして『ウフーン』と甘つたるく言うだけのルタ流究極奥義である。だが、今までこの技が使用されたことは無い。なぜならこの技の使用には大いなる勇気と、莊厳たるプロポーションが必要となるからである。

「いや、までよ。そもそもあのリーダー格のやつはオスなのかしら、メスなのかしら？口調はどうちつかずだし。いくら大人の色氣を全解放しても相手がメスじやなあ・・・」

ボソボソと独り言を呟く小娘は、今年で12になります。

「さて、そろそろ“お・あ・そ・美”もいいでしょ。グラムども、こいつら刻んじゃつてちょお～だいつ！」

『一キキッ！～！』

一斉に飛び掛るグラム達。商人達は目をつぶつて神に祈り、ルタは輸送車の中に身を引っ込めた。

その時、一陣の風が吹く。

「悪い奴はいねえかあああああつ～～～～～～～」

声 人の声。そして、それをかき消すように、直後。

“ 度午後五ゴゴ午後語ツメキゴンシツ
砂漠に轟音が鳴り響き、砂が巻き上がった。
異様な熱気が周囲を覆つ。

「うわわ、なに、ナに、ナニ？？？？」

薄れてゆく砂塵の影に佇むのは

1人の、少年。

砂煙の中に立つのは少年。しかも背は低い。
目つきは煙でよく見えない。
メタ的に言えば・・・・・・

田は幼い猫科のように釣り上がり、大きい。
髪は茶色が見える濁つた金色で、剛毛。
衣類は下に布を一枚巻いているだけで、簡素。
隠す氣の無い胸元には、文様。

こんな少年が突如として出現した　　というか降ってきた。

グラムも、商人も、皆「？」を浮かべて黙つた。少女も同じく。
そんな1人浮きまくつている状況なのに。少年は勇ましく、一番
姿が目立つているハイ・グラムを指差した。

「おい、お前！　悪い奴はどこだ！！！」

自信満々に、素晴らしい意味が解からない。高貴な半漁人は口を
歪めて呆けている。

少年は拳動不審に周囲を見渡し、唸る。

その姿と言動から、ハイ・グラムはこれを「挑発」と受け取つた

ううう。

血漫のトライデントを振りかぶる……。

「そいつよー！」

響き渡つた高い声。それは少女、ルタの声。
輸送車から飛び出した少女が指差すもの。それはもうひるんハイ・
グラム。

「どれだ！」

半裸の少年が声に反応して振り向く。
いきなり指定されたのは化粧の濃いハイ・グラム。彼は「はあ？」
と不機嫌に呟いた。

「お前か、悪い奴！！」

拳を突き出して叫ぶ半裸の少年。口には牙のような歯が見える。
「あらら……お嬢ちゃん。いきなり人を指差すなんて、失礼よ！」
ニマニマと、笑つてはいるが。コメカミには血管が浮き出ている。
人じやないでしょ！ と、ルタが心の中で叫んだ。
「でも、私が悪い奴……？ オホツ、それって大正解！」
クルクルとトライデントを回して微笑むハイ・グラム。
「あなた達にとつては美しき死神だものね！」

「（美しい　？）

「それにしても……可愛いわね。うん　　決めた！　次はあなた、
あなたを惨殺してあげルつ……！」

「ういー！？」

「オツホホホ！」

高笑いがうるさいハイ・グラム。「笑えよーーー」と怒鳴られ、周
囲のグラムも「一キ一キ」と汚い笑いの合唱を始めた。

とつさに輸送車の影に隠れるルタ。「やばい、でしゃばつちやつ
たかも。。。」と苦笑いを浮かべる。

「おい、お前」

楽しげなハイ・グラムに声がかかった。

「あらら、謎の少年ちゃん。大丈夫、あんたも『コレで首を撥ねてあげるから』

「お前が悪い奴なんだな」

半裸の少年が拳を打ち鳴らして尋ねる。

「ウルサイわね。そうよ、だからあんたもサクッと殺つたげるつてば。ちょっと待つてなさ」

「わかった！」

言葉を残して。そこは虚空^{くうくう}。

ハイ・グラムの見ている景色。そこに、少年の姿は無い。あれ、と再び巻き上がった砂塵を避けながら戸惑つ。

灼熱の砂漠。その日差しが遮られた。

ハイ・グラムが見上げる。その足元には

影。

少女は空を見ていた。少し離れた位置にいたので、良く見えていた。

小柄な彼は、助走もなく、単にそこから飛び上がった。

ただし、尋常ではない高さに……。

巻き上がる乾いた砂。

突き刺すような日光。

それらを纏い、巻き上げて。

遙か眼下に見上げる半漁人の呆け面。

「え、な　あんた、それ、な

冷や汗の半漁人の遙か頭上。

見下ろす少年は“　その身の3倍　”　はあらつかという大剣を振りかぶっている。

化粧の濃い半漁人が口を開いたまま絶句した時。その場に、再び轟音と砂塵が荒れ狂った。

衝撃の突風が輸送車を揺らし、周囲の雑魚グラムをひっくり返す。高貴な半漁人の「ピギヤアアアアア……！」といつ鳴き声は、轟音に混ざつて誰にも聞こえはしなかった……。

少女は驚き、言葉を失う。

砂漠に立つ少年は、手にある大剣を掲げた。

そこから少し離れた所。

男は、キャラバンの影を覆つた砂塵を見て。「随分派手なグラムだな……」と呟いた。

トンボの物語は、つづく

第一話、出現！！！（後書き）

GO、NEXT！！！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4737m/>

ドラゴンフライ！

2010年10月8日22時43分発行